民報サロン

母の遺した言葉

近藤　有美

母親になって1年と半年がたった。わが子の首がすわり、寝返りをうち、つかまり立ちし、歩き始めたかと思ったら、お話ができるようになった。ご飯を食べることや着替えも自分でやろうとし、できることが少しずつ増えてきて、うれしそうな息子の様子を見て日々の成長をいとおしく感じている。

一方で大変なことも増えていった。子供の夜泣きには夫と交代しながらあやして寝不足で仕事に行ったり、子供の体調不良で仕事のスケジュールを全てキャンセルしたりしなくてはいけなくなった。子供を寝かしつけてから家事や仕事をするようになった。

もちろん育児に休みはない。家に帰ってからも一息つくこともなく、ご飯を作って食べさせて、おむつを替えてお風呂にいれて、歯磨きして寝かしつけて、あっという間に一日が終わる。育児が思い通りにいかず、悩んだ私のスマホの検索履歴は「1歳児　夜泣き寝かしつけ」などの育児に関するキーワードでびっしりと埋め尽くされている。

ただこれだけ大変であったとしても、不思議なことに息子から得る喜びや幸せな気持ちが上書き保存されていく。大変だけど大変じゃない。育児って不思議だ。

自分が親になってみて今、しみじみと親の苦労を実感している。だからこそ、自分の母親が生きていたら、こんな話がしたかったな、こんな時に母がいてくれたらといつも何かあるごとに涙を浮かべながら、ふと母を思ってしまっている。

母は18歳から55歳まで保育士として働き、その間起業した父を支え、3人の娘を育てた。仕事を早期退職した翌年に発病し、闘病の末他界した。娘たちの花嫁姿も、孫の顔も見ることがかなわなかった。

ごく当たり前のようにしてあげられたはずの親孝行を母にできなかった悔しさがある。ただ、その心残りが今の私の原動力につながっているのは間違いない。33歳になった今でも心のどこかで母に「よく頑張ったね」とほめてもらいたいと思う。親はいつまでたっても親なのだ。

亡くなる前に母がつづってくれた言葉がある。「笑顔は人を幸せにする。和顔施。人に対して笑顔で接すると幸せになる」。和顔施は仏教の教えでいつもなごやかに穏やかな顔つきで人に接することである。くじけそうな時やつらい時、母が遺（のこ）した言葉を読み返し、鏡を見て襟を正す。

確かに眉間にシワを寄せて不機嫌そうにしている人に近寄りたい、話しかけたいとは誰も思わないし、相手が笑顔で接してくれればこちらも笑顔になる。当然だ。単純だが切羽詰まっていると、そんな当たり前なことすらも忘れてしまうのだ。昔から落ち込むと感情が顔に出やすい私を見抜いて、母が遺してくれた言葉なのかもしれない。

自分たちの親がたくさんの愛情を注いでくれたように、親になった今、私たちが息子の一番の理解者で、誰よりも一番応援してあげられる存在でありたい。亡き母が遺してくれた言葉は直接会うことがかなわなかったわが子にもしっかりつなぎ、大切にしていきたい。

（中島村滑津、フジ機工社長）